

不登校により学びにアクセスしない子どもたち

文部科学省も静岡県教委も、「不登校により学びにアクセスできない子共たちをゼロ」にすることを目指して、「不登校生の学びの確保」のために様々な場を用意して施策を講じている。文科省のHPでは、「不登校により公的機関や民間の相談機関にアクセスしない」子どもたちが全国で15%以上いる（不登校約30万人のうち4.6万人の割合）という。だが、現在は35万余の不登校の子ども達がいるから、実数はもっと多いことになる。

「学びにアクセスできない子共たち」というより、多くの不登校生が学びの場に向かっていられない（ないしは、向かう気力がない、否、その気がない）、学びにアクセスしない、と私は捉えている。

30余年不登校の子ども達と対峙してきた経験から思うに、不登校の始まりの頃は子どもたちは学ぶことを拒否し、学ぶ気力も意思も示さない。布団をかぶり、寝ているでもなく、ぼーっとして時間を過ごす。

何故だろう？唯一知的好奇心を持つ生物である人間が、学びに興味を示さないのである。同紙の「どうして学校に行くのか？」の項でも扱ったが、今の子どもたちは、「学び」をどう捉えているのか、これまで接してきた子どもたちの様子から私は考えてみた。

終身雇用が当たり前でなくなった現代、「いい高校」「いい大学」「いい会社」が安定した人生に繋がる訳ではない。今は価値観の多様化で、小学校も行かず詩をしたため詩人になった人もいるし、中学校も行かず作詞、作曲に打ち込み有名な音楽家として活躍している人もいる。ユーチューバーやインフルエンサーもが活躍する世の中である。

そんな中で不登校の子どもたちは、「何のために勉強するの？」と訴える。「学ぶ目的」を見失っているのである。自暴自棄になってる子もいる。それはひとつは価値観の多様化で、彼らは将来の自分の姿を一つに描き切れない、絞り切れずにいる。そしてもうひとつは、どんな職業が自分に向いているのか分からぬ。それは裏を返せば、自分自身がどんな人間か分からなくなっている。

人は他人との比較で己を知る。本HPの「ひげぐま先生のひとりごと」で書いたが、2000年前後の「ゆとりのある教育」によって相対評価（他人との比較での評価）から絶対評価（その人の能力や実績の客観的評価）に変わった影響で、子どもたちは自分の姿が見えなくなっている（参考「脇役になれない子どもたち」桑島隆二著）。不登校になって私の元に相談に来ると、心理テストを探り心理分析を行う。すると興味津々に耳を傾け、そしてぼく（わたし）ってそんな子なんだと驚く。

少なくともこのふたつのことから、今の不登校の子どもたちは「学ぶ目的」を見失っている、と私は思う。

私が運営するフランチャイズの東進の本部方針では、特に高校生は志を持って学習し、世界に貢献できる人財に成長することを目的に、毎月「未来発見講座」や「トップリーダーと学ぶワークショップ」を行い、自分の将来の夢を語る「夢作文」を書いて、受験勉強に入る。

そうして世界の様々な分野で活躍している研究者や、様々な業界でトップリーダーとして活躍している人の話を聞くもいい。あるいは、伝記を読むのもいい。お父さんやお母さんに、今の職業に就いた話を聞くのもいい。そして、「いい高校」「いい大学」「いい会社」に入る、小さくても自分の会社を設立する、バックパッカーとして世界を渡り見聞を広めてから仕事を見つけたい、ボランティア活動をして将来の自分を見つけるかもしれない、興味のあることを研究したい、家業や親戚の仕事に就きたい、などと自分の夢を描き始める。

また一方で、ついでにお父さんやお母さんに、「ぼく（わたし）は、どんな子？」と聞くこともいい。あるいは、夜中、車や人が全く来る気配がない時、赤信号の横断歩道で自分はどう行動するか。歩道橋を登っているおばあちゃんを見掛けたら、自分はどう思うかどう行動するか。毎日寝る前に、今日一日の自分を振り返えるか（日記をつけているか）。そんな自分を考えて、自分はどんな子かを考えてみる。私がよく言つてることだが、同世代の仲間たちと群れ集う様々な活動に参加して、仲間を知り、自分を知る。

そうすることで、自分の「学ぶ目的」を掴むことだと思う。そうすればおのずと「学びにアクセスする」ようになる。

一方、将来の夢はあるから「学ぶ」必要を感じていない不登校の子どもたちがいる。本紙でも書いたこと（タイトル「ユーチューバーになるから、学校に行く必要がない」）があるが、ユーチューバーになりたい、インフルエンサーになりたい、有名になりたい、という夢はあるが、ユーチューブを一日中見ている、インスタグラムやXばかり見続け、読み続けている。「学ぶ」必要を感じていないから、学びにアクセスしない子どもたちである。

本気でユーチューバーになりたい、インフルエンサーになりたい、有名になりたいと思うなら、配信を始める、インスタグラムやXを始める、芸能事務所に行くなど、行動に移すことだ。行動に移せば、自分が本当にそれになれるかどうかが分かる。しかし、彼らはそうした行動に踏み切る勇気もなく、雄弁に自分の夢を語っているだけで、大事な学齢期、青春期を無為に過ごしている。

また、不登校になり公的機関や民間の相談機関に行っても、「気が満つるまで待ちましょう」と言われ、具体的な解決策が得られなく、親子ともども諦めているかもしれない。だから、それ以上「公的機関や民間の相談機関にアクセスしない」のだろうと思う。大御所の「来訪者中心主義」を批判する上で申し訳ないが、来訪者の話を聴いて聴いて、その来訪者が持っている答えを引き出す相談姿勢では、その答えが分からない来訪者は疲弊してしまう。そうして諦めかけていたところ、私を紹介され来る人が実に多いから、そう思う。

しかし、本紙で書かれた多くの子どもたちの場合を読んで頂ければお分かりになると思うが、不登校もきちんと対応すれば必ず解決する。人間は社会性を有する生物故に、その社会性が育たず不登校に苦しむ（苦しみも感じない子どももいるが）。それ故、その社会性（非認知能力）を育む活動・訓練を行うことで、その解決は図れる。勿論、不登校の解決とは、当該学校への再登校もあれば、適応教室やフリースクール、学習塾等で学習し始める、などの社会的自立である。

子どもが不登校になり「気が満つるまで待」っている保護者の皆さんや、不登校の解決を

諦めている子どもやその保護者の皆さんに、人間は社会性を有する生物故に、不登校は必ず解決する、との認識に至れば、「不登校により公的機関や民間の相談機関にアクセス」する。よって、文部科学省や静岡県教委が目指す、「不登校により学びにアクセスできない子供たちをゼロ」が実現する。

そのために、不登校は必ず解決するとの認識を普及すべく本紙で、様々な不登校の子どもたちが不登校を乗り越え、社会的自立を果たした姿を描き続けている。